



子連れフィールド・ワーカー奮闘記 ルーマニア篇 トランシルヴァニアで息子と暮らす

大塚 奈美 (おおつか なみ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程

フィールドで初育児

わたしのおもな研究対象はハンガリーの民俗舞踊。都市での娯楽の場や舞踊団の練習場、農村の娯楽の場や通過儀礼に伴う踊りなど、さまざまな場面にかけは調査をおこなっている。博士課程進学後、子どもに恵まれもつすぐ三年になるが、現在は、ルーマニア・トランシルヴァニア地方を中心に、調査を続けている。ハンガリーの踊りの調査をするのに、なぜルーマニアなのかと思われる方もいらっしゃるかもしれない。トランシルヴァニア地方は第一次世界大戦後にルーマニア領となったため、現在も多く、ハンガリー人が暮らし、ハンガリーの古い文化が残っている地域なのである。

さて、わたしが現在調査の拠点にしているのは、人口四〇〇人程の小さな村だ。住民の大多数はハンガリー人。畑でジャガイモ、トウモロコシ、マメなどの穀類やその他の野菜、果物などを作り、ウシ、ウマ、ブタなどの家畜やニワトリ、シチメンチヨウ、ガチヨウなどの家禽類を飼育するのがここでの一般的な暮らし。出産前にも調査などで訪れたことはあったが、子どもが五カ月のころから、断続的に長期滞在の調査を始めた。農村での短期の調査は何度もしたが、生活、生活をするのは初めてである。慣れない農村での家事と初めての子育てをしながら、



古い写真の収集の現場で

でもかなりの量になるし、抱っこをした手をつないだり、両手がふさがってしまふ。公共交通機関での移動が困難なときは運転手を雇って移動することもありますが、大学院生にとっては大きな出費。幸い、息子は乗り物が大好きなので、移動は苦にならず大喜びである。もちろん、毎日遠出をするわけではなく、普段は、時間の許す限り家での作業や村内での調査をおこなう。村では一般的に人と人とのかわりが強く、人口も少ないために村の人はほぼ全員が顔見知りで、出会ったときにはあいさつをしたり世間話をしたりするのが普通。子どもといると、お宅に入っていたりすることも、現地での生活の実態を垣間見る機会ともなっている。

生まれて間もなく大きな移動を繰り返すことになった息子。調査地の畑や動物は格好の遊び場、遊び相手でもある。子どもは何でもよく見ていて、野菜や果物をとってきたり、卵を集めたり、薪運びをしたり、特に教えなくても自分なりに仕事を見つけては楽しんでお手伝いをしていく。会う人は皆話しかけてくれるので、現地語でのコミュニケーションの機会も多い。わたし自身の育った環境とはまったく異なっており、戸惑うことも多いが、子どもはすぐに適応して楽しむ力も持っている。それぞれの地のよい点を吸収し、それが彼の今後の人生においてよき思い出・財産となることを願っている。

息子の財産に

調査において、重い機材をもって移動することに慣れてはいたし、母乳育児のため、ミルク持参の負担がないのは幸運だったと思う。それでも、おむつや着替え、おもちゃなど、子どものための荷物だけ

調査において、重い機材をもって移動することに慣れてはいたし、母乳育児のため、ミルク持参の負担がないのは幸運だったと思う。それでも、おむつや着替え、おもちゃなど、子どものための荷物だけ